善本とされるが，故宮本の影印は困難であったものか．いずれにしろ，このたびの影印と翻刻によって，本来の姿に近い『本草和名』が容易に利用できるようになったことはまことに喜ばしい．翻刻では，版本および故宮博物院本との異同が頭注に記されており，行届いた作業がなされている．

研究篇では，第一章（p367～391）において丸山が，ほぼ同時代に流布していた敦煌写本『新修本草』と『本草和名』との記載を比較し，後代の『証類本草』よりもよく記載が一致することを明示し，『本草和名』が『新修本草』に対する辞典として作られたことを論じている．

第二章（p393～421）では武が伝本調査の結果を細説する．惜しむらくは，識語の句読の切り方に瑕瑾があるように見える．

第三章の第一節（p423～449）において武は，『倭名類聚抄』と『本草和名』に引用されている出典（本草書，食経書，養生書，医方書等）に着目し，なかでも先行研究（河野敏宏・宮澤俊雅ら）の蓄積がある『新修本草』以外の出典について検討している．第二節（p450～479）では，狩谷棭斎『箋注倭名類聚抄』を手掛かりにして，『倭名類聚抄』が『本草和名』から引用した箇所において誤りを生じている箇所について検討し，『箋注倭名類聚抄』の所説が今日の研究水準から見ても参照すべきものであると論じている．

補論における丸山の所説は，『本草和名』に直接に関わる内容ではなく，中国・日本の律令のうち「医疾令」の復原に関する先端研究であり，これに対する論評は評者の力量を越えるものである．ただ全体として見るならば，出土木簡・北宋天聖令・大谷文書などの新出資料と，江戸期以来継続されてきた復原研究の蓄積とを絶えず参照し修正することによって，唐代の復原に漸進する歩みを感じ取ることができるものであり，それは上述の小島宝素・狩谷棭齋・森立之らが新資料によって古文献研究を漸進させた歩みとも重なるもののように感じられた．

（町　泉寿郎）

［汲古書院，〒101-0065 東京都千代田区西神田2-4-3，TEL. 03（3265）9764，2021年8月，A5判，605頁，13,000円＋税］

丸山マサ美 総監修，金井一薫・佐々木秀美・平尾眞智子 監修
『アニメでわかる看護の歴史（DVD）』

かつての失敗とそれを乗り越え，築き上げてきた現在を知ることができるのが歴史を学ぶことのよいところである．人々の幸福よりも医学の発展を重視した数々の人体実験，有害と知りながら使用や販売を阻止できなかった薬害などが，このDVDで紹介されている．たしかに倫理的な不適切な事例ではあるが，それらは人類が痛い思いをしながら学んだ経験でもあり，これらを学ぶことは将来の類似した状況での判断の基盤となるであろう．また現在の医療や医学研究にともなう一見して煩雑な手続き，たとえば臨床でのインフォームドコンセントや研究倫理審査が必要な理由や，不正の事実を調査するための告発者の保護を前提とした告発ルートの設置の必要がよく理解されると思う．

人々の価値や医療者の倫理も，時代により変化していく．かつては善行，パターナリズムに基づく医療が人々により当然のように受け入れられてきたこと，さまざまな裁判事例から，今日では個人の知る権利や人格の自律に基づく意思決定が重要とされるようになったことが紹介されている．また近年の生殖医療，ゲノム編集など，これまでの人間の自然のあり方に反するとともに，生命の選別につながるではないかとの危惧を有する技術の発展についても触れられている．医学の発展がかえって倫理的な状況をつくりだしている現状がよく理解できる．

印象に残ったのは，DVDのなかで医師と患者との信頼関係が重要であることが繰り返し伝えられていること，そして最後に医学を進歩させる責

任と社会的な責任が言及されていることである．とりわけ社会的責任という言葉が気になり，考えさせられた．個人の意思決定を重視しながらも，その決定を合理的なものとし，大切な家族にとって理解可能なものとするとともに，人間の尊厳を大切にする社会を維持していくことはできるだろうか．そして生命の危機を救うとともに，救われた人々のQOLを支えることにどのように貢献できるか．

全体で25分の長さだが，学習目標が絞られており，内容もちょうどよい分量であった．登場人物の学生との質疑応答も的を得たものであり，学習を深めるものとなっている．アニメという手法については，歴史を研究するものとしては可能なかぎり本物の史料に触れてもらいたいと思うが，適した史料がない場合，プライバシーの問題や所蔵者の意向により利用許可が得られにくい場合，被害状況など残虐で負の影響を与えることが予想される場合の表現にはよいと思う．

同じシリーズの「アニメでわかる看護の歴史」については，導入編としてはよいが，通史を20分で説明するのは難しかったのではないかと感じた．看護においても歴史を学ぶことが有効なテーマがいくつかあると思われる．是非，看護の実践，教育，管理などテーマ別の作成についても検討してもらいたい．

（川原由佳里）

［丸善出版（映像），〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17，TEL. 03（3512）3252，2021年11月，DVD・配信，38,000円＋税］

香西豊子 監修
『ぼくらの感染症サバイバル――病に立ち向かった日本人の奮闘記――』

2020年から始まった新型コロナ感染症COVID-19のパンデミックで，社会も経済も，そして人々の生活も大きな影響を受けてきた．このような病気の蔓延は大きな不幸ではあるが，人々が医学・医療のあり方に関心を向けるきっかけにもなった．感染症の歴史を扱う書籍も次々と，これぞとばかりに出版されている．医史学の研究者として，医学の歴史から学んできたことを世に伝えたいという思いも湧いてこよう．

一般向けに書かれる啓蒙的な書籍を書くのは，最先端の研究成果をもとに書かれる専門的な書籍を書くよりも楽だと思う人がいるかも知れない．しかし私自身が，最先端の研究論文や高度な専門書から，医学生やさまざまな種類の学生向けの教科書やら，一般向けや子供向けの親しみやすい書物の執筆や監修に数多く携わってきて言えることは，書物を書くことの難易度に大きな差がある訳ではない．その書物が成功するか否かは，対象とする読者にふさわしい内容が書けるかどうかにかかってくる．

医学史を扱う一般向けを意図した書物がこれまでなかった訳ではない．拙著『医学全史』（ちくま新書）もそうだし，新書など一般向けの書籍は，やや肩に力の入った知的好奇心の旺盛な人向けというところだろう．肩の凝らないものとしては，茨木保『まんが医学の歴史』（医学書院）があるが，著者は医史学の専門家ではない．

本書『ぼくらの感染症サバイバル――病に立ち向かった日本人の奮闘記――』は，プロローグ「感染症のきほん」に続いて1章「古代・中世（飛鳥～室町時代）の感染症サバイバル」，2章「近世（江戸時代）の感染症サバイバル」，3章「近代（明治～大正時代）の感染症サバイバル」，4章「現代（昭和時代）の感染症サバイバル」，5章「現代（平成～令和時代）の感染症サバイバル」とエピローグ「終わらない感染症サバイバル」からなる．それぞれ数頁の漫画に続いて見開きで解説がつく形の，これぞ一般読者や中高生を視野に入れた，フレンドリーで上質な本である．このような本は容易に一人で作れるものではなく，監修をする人，マンガを描く人，原作と執筆をする人，企画編集をする人など多数の信頼と協力の下に始めて実現